

日本学術会議市民公開講演会 「市民に向けた巨大津波の最先端科学と正しい防災知識」

主催 日本学術会議第三部、同中国・四国地区会議

共催 高知工科大学

後援 日本学術協力財団、高知県、工学系 6 学会長連絡会議、四国 5 大学連携防災・減災教育研究協議会

2015 年 8 月 26 日（水） 高知工科大学永国寺キャンパス

日本学術会議会長 大西隆

日本学術会議第三部及び中国・四国地区会議主催で、「市民に向けた巨大津波の最先端科学と正しい防災知識」が開催されるにあたり、日本学術会議を代表してご挨拶申し上げます。

日本学術会議では、毎年、三つの部が、それぞれ夏季部会を催す際に、市民の皆さんにもお出でいただく公開講演会を開催しています。今年は、第三部主催の公開講演会を高知県で開催することから、巨大津波対策をテーマに設定しました。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、津波によって多数の人命が失われ、さらに、併発した東京電力福島第 1 原子力発電所の重大事故によって、放射能拡散による被害が今でも続いています。これらの被害からの復興は、今なお被災地にとって最優先の課題です。一方で、災害や復興の過程から多くの教訓を学び取って、次の自然災害への対策にいかすことは、これからの自然災害による被害を軽減する上で重要なテーマです。高知県は、いつ起こってもおかしくないと言われ、起こった際には、甚大な被害が想定される南海トラフ巨大地震及びそれに伴う巨大津波の被害が及ぶ地域なので、正しく教訓をいかすことは喫緊の課題といえます。

高知県では、既に、防波堤、防潮堤の整備、あるいは津波避難タワーの整備が進められている地域があり、教訓をいかした対策が進み始めていると伺っています。東日本大震災の経験では、「想定外」という言葉が、一つのキーワードになりました。三陸で起こったそれまでの自然災害を上回る災害になったので、大きな被害が出たという意味です。これまで起こった自然現象と同じ程度の自然現象しか起こらない、あるいは津波や地震対策を行う際に想定した自然現象以上にもものは起こらないと考えることが、「想定外」の自然現象が起こった際に大きな被害をもたらします。もちろん、それぞれの対策を考える際に、災害に結びつく自然現象を想定することは必要ですが、それ以上のものが起こった場合にどうするのかも併せて考えるという自然現象への柔軟な対応を忘れるべきではありません。それに対する対策は、「避難」することや、居住地を予め安全な場所に移しておくことになるかと思えます。大地震や大津波の際に、人的犠牲をゼロにするにはどうしたらいいのか、常に安全を高める観点から考え、対策を向上させることを忘れてはならないと思えます。

こうした、安全向上への高知県をはじめとする各地の試みにとって、本日のシンポジウムが有意義なものとなることを祈念します。

また、共催していただいた高知工科大学、そして後援いただいた各団体の皆様に心からお礼を申し上げます。